

黙示録17章7-18節 「大淫婦の秘められた意味」

1A 獣 7-14

1B 昔おり、今はいない者 7-8

2B 七つの頭 9-11

3B 十本の角 12-14

2A 大淫婦 15-18

本文

黙示録 17 章を開いてください、私たちは前回、17 章の前半部分 1 節から 6 節までを読みました。今晚はその続きです。私たちは前回、大バビロンの姿を見ました。主は、黙示録 14 章から、バビロンが滅びることについて宣言しておられました。16 章における、最後の最後の災いでバビロンが倒壊します。そして 17 章に入ります。その存在について、獣の上に座っている、世界の王たちと淫行をしている女であり、金や宝石、真珠で身を飾り、金の杯をもって、なんとイエス様を証する者たちや聖徒たちの流された血を飲んで酔っていました。これは驚くべき、光景です。使徒ヨハネは、6 節で「この女を見て、非常に驚いた。」と言っています。

そしてついに、私たちは、これまでバビロンと呼ばれる都について、謎めいた思いがしていたのですが、それを御使いが解き明かす場面を読むこととなります。女もそうですが、獣の正体についても、数多くこれまで出てきていながら、そこにある「七つの頭」そして「十本の角」についての意味を知ることはありませんでした。その解き明かしを見ていくのです。

1A 獣 7-14

1B 昔おり、今はいない者 7-8

⁷すると、御使いは私に言った。「なぜ驚くのですか。私は、この女の秘められた意味と、この女を乗せている、七つの頭と十本の角を持つ獣の秘められた意味を、あなたに話しましょう。

御使いが、「なぜ驚くのですか。」と言って、ヨハネが驚いていることに驚いています。御使いたちにとっては、バビロンの存在というのは、世々に渡って知られていました。バビロンの発祥地であるユーフラテス川のところに、エデンの園がありましたが、そこにケルビムがおり、そこで墮落しました。それがサタンの起源です。エゼキエル書 28 章ですが、ツロの王への預言にそれが書かれています。そして、蛇の形をしてエバに現れて、彼女を惑わし、アダムに罪を犯させました。次に、ノアの時代の洪水の後に、地に満ちなさいという神の命令に反抗して、権力者としてニムロデが台頭、シニアルの地にバベルの町を建てました。創世記 10 章です。ニムロデは、続けて、アッシュルに進出、ニネベの町も建てています。ここから後に、主に逆らう力ある国アッシリアが生まれます。

そしてバビロンの王に対する預言の時に、はっきりとその背後の、明けの明星と称されるサタン
の姿が出てきます(イザヤ 14:12-15)。ですから、天において御使いたちは神に仕えているので
すが、反逆しているサタンが、バビロンやその他の権力者の背後に働いていることは、いつも見てい
たことであるし、驚くに値するものではなかったのです。

さらにゼカリヤ書にも、バビロンの姿が天における悪の支配の中で登場します。「私と話してい
た御使いが出て来て、私に言った。「5:5-11:5 私と話していた御使いが出て来て、私に言った。
「目を上げて、この出て行く物が何かを見よ。」6 私が「これは何ですか」と尋ねると、彼は言った。
「これは、出て行くエパ升だ。」さらに言った。「これは、全地にある彼らの目だ。」7 見よ。鉛のふた
が持ち上げられると、エパ升の中に一人の女が座っていた。8 彼は、「これは邪悪そのものだ」と
言って、その女をエパ升の中に閉じ込め、エパ升の口の上に鉛の重しを置いた。9 それから、私
が目を上げて見ると、なんと、二人の女が出て来た。その翼は風をはらんでいた。彼女たちには、
こうのとりの翼のような翼があり、あのエパ升を地と天の間に持ち上げた。10 私は、私と話してい
た御使いに尋ねた。「この人たちは、エパ升をどこへ持って行くのですか。」11 彼は私に言った。
「シニアルの地に、あの女のために神殿を建てるためだ。それが整うと、そのこの台の上にその升を
置くのだ。」エパ升が出てきますが、18 章においてバビロンが巨大な富を蓄える存在として登場
します。そして罪悪だと呼ばれる女ですが、淫婦のことです。それから、鶴(こうのとりの)のような翼を
持っていますが、これは神に仕える天使ではなく、反逆する手下の墮落した天使たちのことです。
そしてこれが、シニアルに神殿、偽りの宗教を安置されるというのです。バビロンのことです。

これだけのことが、歴史が始まってから天において繰り広げられていたのですから、ヨハネが初
めて見るかのように驚いているのを見て、かえって驚いているのです。そして、「私は、この女の秘
められた意味と、この女を乗せている、七つの頭と十本の角を持つ獣の秘められた意味を、あな
たに話しましょう。」と言っています。まず、獣の秘められた意味から話します。これは、「これまで
隠されていたけれども、今、明らかにされる」という意味合いがあります。これまで、ずっと存在して
いたけれども、今、それが暴露されます。

^{8a} あなたが見た獣は、昔はいたが、今はいません。やがて底知れぬ所から上って来ますが、滅び
ることになります。

初めに「獣」ですが、これの出てきた始まりを見てみましょう。実は、竜がその背後にいる
ので、竜の姿にも獣の姿が反映されていました。黙示録 12 章 3 節で、「見よ、炎のように赤い大
きな竜。それは、七つの頭と十本の角を持ち、その頭に七つの王冠をかぶっていた。」とあります。
そして、竜が地上に落とされたので、怒り狂って、海辺の砂に座りました。そして呼び起こしたのが、
この獣です。13 章 1-2 節を読みます。「また私は、海から一頭の獣が上って来るのを見た。これ
には十本の角と七つの頭があった。その角には十の王冠があり、その頭には神を冒瀆する様々

な名があった。私が見たその獣は豹に似ていて、足は熊の足のよう、口は獅子の口のようにであった。竜はこの獣に、自分の力と自分の王座と大きな権威を与えた。」ダニエル書 7 章に、第一の獣が翼の持っている獅子、第二が熊、第三が豹、第四が鉄のきばと、十本の角を持つ獣が出てきましたが、黙示録の獣はどこの時代というよりも、全ての獣の要素を持っている存在であることが分かります。豹に似ているが、足は熊のようで、口は獅子の口のようなのですから。そして、その七つの頭のうちの一つに、致命的な傷を受けるのですが、その傷が治ってしまいました。それで全地の人が彼を拝み、また彼に力を与えた竜、悪魔をも拝むようになります。

その時に、致命的な傷を受けた時に彼は実は、底知れぬ所に行っていました。二人の証人がエルサレムに現れて、火を噴いて預言したことを思い出してください。その時に彼らを獣が殺すのです、「11:7 二人が証言を終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺してしまう。」あの、いなごのような、さそりのような毒を持つ得体の知れない悪霊どもが出てきたのは、底知れぬ所ですが、彼はそこに下り、そして出てきた時に、まるで生き返ったかのようにみなされたのです。そして、二人の証人をも殺します。

この獣について、ヨハネが見た時代において、「昔はいたが、今はいません。やがて底知れぬ所から上って来ます」と言っているのです。底知れぬ所から出てくるのは、やがてと言っていますから、将来のことです。黙示録を紀元後 70 年のローマによるエルサレム破壊でほぼ成就したとする過去派と呼ばれる解釈をする人たちがいますが、いいえ、ヨハネがいた 90 年代の時にも、それは将来の出来事なのです。そしてヨハネの時には、彼は存在していません。ところが、彼は「昔」はいたという人物なのです。

もう一度、これは「秘められた意味」であることを思い出してください、その霊的存在は既に昔からいたのだけれども、明らかにされてこなかったということです。獣について、これは既出の存在です。ダニエル書がそれです。ダニエル書 2 章で、人の像の夢があります。そこでバビロン、メディア・ペルシア、ギリシア、そしてローマ、さらにローマ以後の世界と復興ローマがあります。7 章で四頭の獣が出て来て、第四の獣に十本の角があつて、その間から出てきた小さな角が大きくなり、三本が折れて、非常に大きな角となり、世界を支配するとありました。

しかしダニエル書 8 章において、その角について、ギリシア時代に出て来る人物がその前触れであるかのように登場するのを見るのです。彼が、アンティオコス・エピファネスです。彼が非常に狡猾で横柄であり、数々と周囲の者たちを騙し、力を得て、世界を荒らし、さらにユダヤ人の神への信仰、彼らの守っている律法に無理やり違反させるように強制し、聖所に偶像とそのいけにえを捧げさせた、荒らす忌むべき者であったのです。ダニエル書 11 章にも、分割したギリシア帝国の後の、南の王と北の王との戦いが預言されており、北の王からアンティオコス・エピファネスが出て来る預言があります。

8 章にしても、11 章にしても、彼の姿が詳細に預言されていますが、後半部分で、彼の行動には合致しない誇張されているように見える、預言に飛躍します。「8:25 狡猾さによってその手で欺きを成し遂げ、心は高ぶり、平気で多くの人を滅ぼし、君の君に向かって立ち上がる。しかし、人の手によらずに彼は砕かれる。」「11:36-37 この王は思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高く上げて大いなるものとし、神々の神に向かって驚くべきことを語る。彼は栄えるが、ついには神の憤りで滅ぼし尽くされる。定められていることがなされるからである。彼は先祖の神々を心にかけて、女たちの慕うものも、どんな神々も心にかけていない。すべてにまさって自分を大いなるものとするからだ。」

したがって、アンティオコス・エピファネスに、テサロニケ第二 2 章に出てくる「不法の秘密(2:7)」が働いており、それで彼が終わりの日に現れる獣の姿を表していました。そしてこの箇所には、その背後で働いている悪魔が、終わりの日に反キリストによって行なおうとしていることが、現れているのです。つまり今、御使いはヨハネに、「昔、荒らす忌むべき者としてアンティオコス・エピファネスに働いていたが、今はそのような人物はいないが、将来、出てくるのだ。」と言っているのです。

^{8b} 地に住む者たちで、世界の基が据えられたときからの書の書に名が書き記されていない者たちは、その獣が昔はいたが今はおらず、やがて現れるのを見て驚くでしょう。

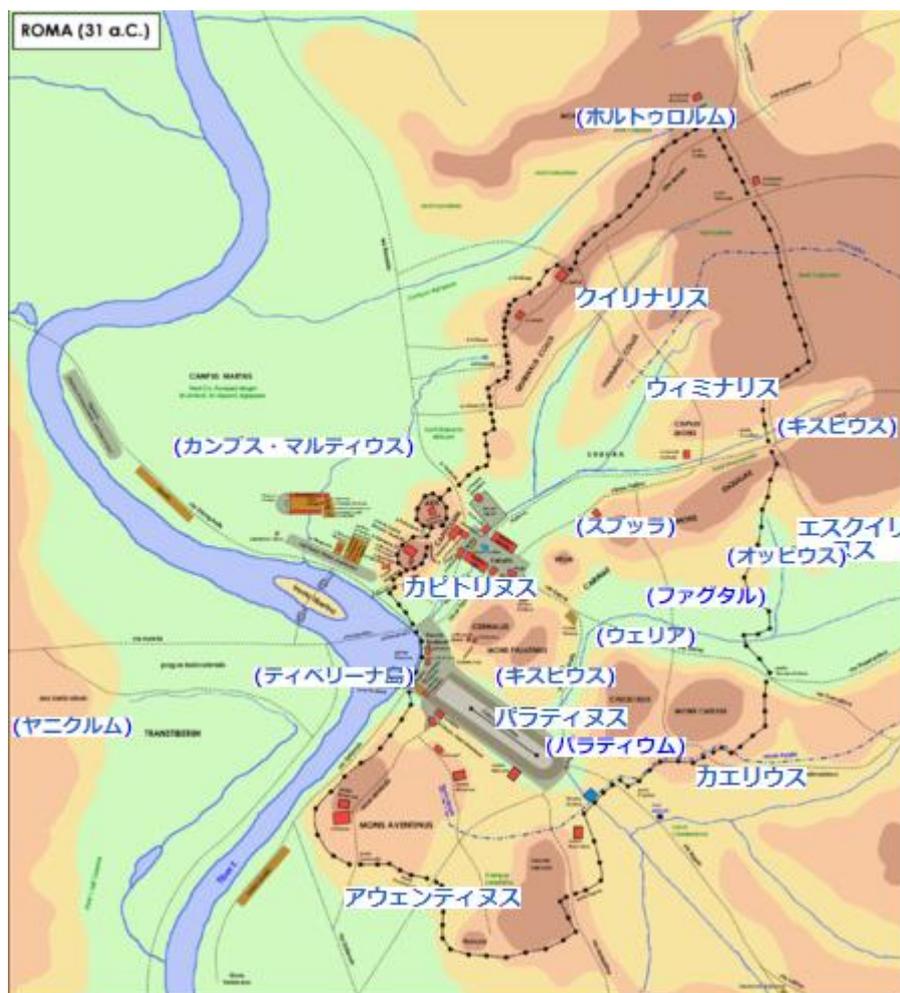
13 章において、地上に住んでいる者たちが、彼がよみがえったかのように現れたのを見て、驚いている姿が出てきます(3-4 節)。その時に、獣を拝まない者たちがいて、その者たちは剣で殺されると預言されています。殺されるのに、それでも拝まないかと言うと、13 章 8 節には「地に住む者たちで、世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されていない者はみな、この獣を拝むようになる。」とあり、私たちの罪のために小羊のように屠られ、血潮を流された、そのイエスを主として告白し、証しを立てているからに他なりません。

けれども、その告白さえ、「世界の基が据えられたときから」と強調されているのです。ペテロを思い出してください、人の前でイエス様を知らないと言いました、でも、人の前で知らないと言えば、神の前でイエス様はその人を知らないと言われていたのではないですか！彼は悔い改め、罪を赦していただきました。そして、彼はイエス様を告白するために、逆さで十字架に磔にされて殉教したと言われています。つまり、主の選びの力なのです。選びを確かなものとしていくのです。私たちがどれだけ愛され、選ばれているかを知ることは大切です。

2B 七つの頭 9-11

⁹ ここに、知恵のある考え方が必要です。七つの頭とは、この女が座している七つの山で、それは七人の王たちのことです。¹⁰ 五人はすでに倒れましたが、一人は今いて、もう一人はまだ来ていません。彼が来れば、しばらくとどまるはずで。

御使いは、知恵が必要だと強調しています。「七つの頭とは、この女が座している七つの山で、それは七人の王たちのことです。」ということです。ここで、七人の王とは何か？という疑問が出てきます。ローマの七つの山のことであるという人たちがいます。確かに、当時、黙示録を読んだ人々は、大きな都と言えばローマのことであり、ペテロ第一にも、おそらくはローマのことを指して、「バビロン」とペテロが言っている箇所があります(5:13)。そして歴史的に、ローマは七つの丘で都の基礎が築かれたと言われていました。「ローマの七丘(しちきゅう)」と呼ばれています。

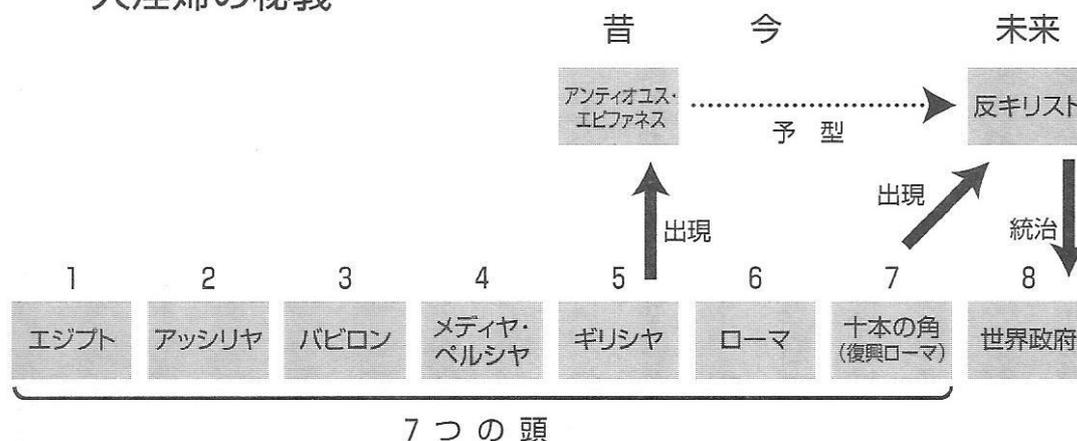


けれども、獣の姿を見てお分りのように、単にローマだけを指しているのではなく、この世の権力者、つまり、世の初めの頃から働いている不法の秘密に関わることであることを教えていました。ヨハネの時代はローマですが、その前に聖書では、世界帝国の姿として五つの国を見ることができます。初めにエジプトです。エジプトは、創世記 10 章によりますとノアによって呪われたハムの子で、ミツライムと呼ばれています。ミツライムがエジプトのことを指します。アブラハムが約束の地に旅した時に、飢饉が来て、それでエジプトに下りました。それで女奴隷ハガルを連れて来て、後にイシュマエルを生んで、そして兄弟に敵対する者となっていきました。エジプトは、世そのものを示しており、私たちに誘惑を与える存在です。そこでイスラエルの民が虐げられて、そしてそこから解放されるのが、神の贖いとなっていくのです。

そして、ユーフラテスとティグリスの間、メソポタミアの地域には、アッシリア帝国が台頭しました。こちらも創世記 10 章で、ハムの他の子でニムロデが出てきます。そして北イスラエルを捕囚の民として連れて行き、またユダの町々も攻めて行きました。次にバビロンです。それからメディア・ペルシアです。ここまでがメソポタミア、すなわち東方からの帝国ですが、力は西に移りました。ギリ

シア帝国です。すべてが、ユダの民を支配し、時に蹂躪していました。これが、御使いが言っている「五人はすでに倒れた」ということです。そして「一人は今いて」は、もちろんローマです。

大淫婦の秘義



では、「もう一人はまだ来ていません」とは何なのか？これを知るのには、ダニエル書 2 章と 7 章を思い出さないとはいけません。2 章において、ローマは鉄の脚の部分ですね、それを示していましたが、それだけでは終わりませんでした。足の部分は、もちろん十本の足の指がありますが、足と足の指が、鉄と粘土が混じった部分でした。「2:43 鉄と粘土が混じり合っているのをあなたをご覧になったように、それらは子孫の間で互いに混じり合おうでしょう。しかし鉄が粘土と混じり合わないように、それらが互いに団結することはありません。」そして 7 章においては、それが第四の獣の十本の角に匹敵します。これは、ヨハネの時代にまだ来ていないと言っています。

私たちは今、その粘土と鉄が混じり合った状態を経験しています。歴史において、西欧において西ローマ帝国が崩れても、その野心は残っていました。東欧においても、東ローマ帝国が崩れてもロシアが、「第三のローマ」と称して今でも野心を抱いています。そして、欧米列強の近代が始まり、ソ連が台頭して、戦後、冷戦になり、そして今に至るまでその対立は続いています。そして世界は、諸国が連合したり、提携することによって生き残ろうとしています。日本もがっちり、その枠組みの中にはめられています。それが、いつかは十の指導者たち、連合体になるでしょう。

¹¹ また、昔はいたが今はいないあの獣は八番目の王ですが、七人のうちの一人でもあり、滅びることになります。

先に話した、アンティオコス・エピファネスを原型とする、反キリストが現れる話をしました。彼は、「八番目の王ですが、七人のうちの一人でもあり」ということです。これは一体どういうことでしょうか？これを知るのには、次の箇所を読み進めると分かります。彼は、次に出てくる復興ローマ、十人の王のうちの一人なのです。そして他の王たちが、自分たちの力と権威をその獣に与えるとある

¹ 「聖書預言の旅」明石清正著 リバイバル新聞社 262 頁

のです(13-14 節)。そうです、十の諸国の連合体によって成り立つ世界が間もなくやって来ます。それはローマを復興させたようなものですが、けれども、ローマのような一枚岩にはなっていません。鉄と粘土で混じり合いません。この時には、宗教体であるバビロンがその世界を牛耳っています。富もそこに集中しています。しかし、その女は獣と他の王たちに倒されます。そして今度は、獣自身が神となり、獣崇拜という新しい宗教となるのです。それが八番目の王であり、黙示録 13 章に出てくる獣の国であり、世界政府なのです。

ダニエルの最後の七十週目の週、七年において前半は、十の連合体であったものが、その半ばで反キリストに権力が移されて、それでその半ばで彼は絶対権力を掌握し、聖所に入って自分こそが神であると宣言、それで偽預言者の助けによって世界中で、自分を拝ませるように強制するのです。偽預言者は獣の像を造り、その像に物を言わせるようにして、それを拝ませるのです。これが八番目の国です。この権力の意向について、ダニエル書 7 章でも十本の角の中に出てくる小さな角として鮮やかに描いています。そして、彼が全権を掌握し、自分こそが神であるとして支配することについては、マタイ 24 章でイエス様もお語りになりました(24:15-1)。それからテサロニケ第二 2 章にも出てきました(2:3-4)。

そして、実は最も大事なものは、「滅びることになります」ということです。荒らす忌まわしい者について、最も詳細に描いているダニエルは、このことを何度も何度も強調しました。時が定められているということ、その患難は一時、二時、半時の間、つまり三年半しか続かないということを述べています。それから、テサロニケ 2 章でも、「2:8 その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。」となっているのです。終わりには、悪の勢力は完全に滅ぼされるのです。忍耐して待ちなさい、希望をもって待ちなさいと主が言われる所以です。

3B 十本の角 12-14

¹² あなたが見た十本の角は十人の王たちです。彼らはまだ王権を受けていませんが、獣とともに、一時だけ王としての権威を受けます。¹³ これらの王たちは一つ思いとなり、自分たちの力と権威をその獣に委ねます。

七つの頭については、時系列的、歴史的な流れでした。エジプト、アッシリア、バビロン、ペルシヤ、ギリシア、ローマ、復興ローマです。そして八番目が、全ての秩序を覆す反キリストの国、獣の国になります。けれども十本の角については、その七つの頭の七つ目のところ、復興ローマの部分です。十人の王ですが、世界に広がる十の連合体であります。十の連合体なので、そんな国と呼べるものではないのです。けれども、王のような権威は受けています。けれども、そこから獣以外の王たちが、心を一つにして獣に権威を与えるのです。

ダニエル書 7 章では、こちら辺を詳しく話しています。「7:23-25 彼はこう言った。『第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らの後に、もう一人の王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを悩ます。彼は時と法則を変えようとする。聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手に乗ねられる。』獣は十人の王のうち、三つを倒して、その三つの部分を自分の支配権とします。それから、残りの七人が彼に権威を委譲します。ですから、十人のうちの一人ではなく、十の連合体のうち、彼がどこからともなく表れて、そのうちの三つを彼が掌握します。それから他の七つが平和裏に権威が移行するのです。二段階を踏んでいます。

王たちが自発的に権威を移行しており、しかも、「一つ思いとなり」ということが曲者です。その彼らは、神とキリストのことになれば一斉に、心をつにして反抗し、戦いを挑むのですから、これは悪魔の一致と呼んでよいでしょう。

¹⁴ 彼らは子羊に戦いを挑みますが、子羊は彼らに打ち勝ちます。子羊は主の主、王の王だからです。子羊とともにいる者たちは、召されて選ばれた忠実な者たちです。」

今、話した通り、獣の国になり、王たちが獣を筆頭にして一つになっています。そして、神とキリストに対して戦いを挑みます。黙示録 16 章のハルマゲドンの戦いがありましたが、それです。そして、19 章の後半にこの光景が預言されており、イエス様は白い馬に乗っておられ、口から出て来る剣によって彼らに打ち勝たれます。王の王として、主の主として来られます。

これまでの帝国の王、バビロンも、ローマも、全ての帝国の王が、自らが王の王、主の主であるとなりましたが、彼らがいかに愚かであることが、主の来臨の、輝かしい栄光と力の前で明らかにされます。そして、「子羊」とイエス様が呼ばれ続けていることが大切です。主は、栄光と力を身にまとわれた方ですが、どこまでも罪を取り除くために自ら屠られた小羊の姿をお捨てにならないのです。キリストの十字架にこそ、人を救う神の力があるのです。

そして、子羊と共に帰って来る者たちがいます。これも聖書を通じて、預言されています。ゼカリヤ書には、「私の神、【主】が来られる。すべての聖なる者たちも、主とともに来る。(14:5)」とあります。テサロニケ人への手紙で、主が聖徒と共に来られることが強調されています。「1テサロニケ 3:13 そして、あなたがたの心を強めて、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒たちとともに来られるときに、私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように。アーメン。」そして天に引き上げられるキリスト者たちは、天において、キリストの権威が与えられ、キリストが地上に戻られる時に、栄光の姿をもって戻ってくるのです。「コロサイ 3:4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光

のうちに現れます。」

そして、とても大切な励まし、慰めの言葉があります。「子羊とともにいる者たちは、召されて選ばれた忠実な者たちです」であります。この三つは、聖書全体の中で何度も何度も、主がご自分の民に教えられていることです。選ばれており、召し出され、そして、主に忠実に仕えるということです。「ローマ 8:30 神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。」主は予め、キリストのように栄光を表す者として定めてくださいました。そしてこの地上において、私たちがあらゆる努力をして、召された事、選ばれたことを確かなものとしていきます。「2ペテロ 1:10 ですから、兄弟たち。自分たちの召しと選びを確かなものとするように、いっそう励みなさい。これらのことを行っているなら、決してつまずくことはありません。」

2A 大淫婦 15-18

¹⁵ また、御使いは私に言った。「あなたが見た水、淫婦が座しているところは、もろもろの民族、群衆、国民、言語です。」

ここから大淫婦の秘められた意味です。大淫婦が、「大水の上」に座っていたことを思い出してください(1節)。その座っていたのは、ここにあるように、「もろもろの民族、群衆、国民、言語」です。バビロンの影響が、このように広がっているのですから、福音が、アブラハムに与えられた祝福として、キリストにあってあらゆる民族、群衆、国民、国語に広がっていかないといけないのです。

¹⁶ あなたが見た十本の角と獣は、やがて淫婦を憎み、はぎ取って裸にし、その肉を食らって火で焼き尽くすことになります。

ここは、注意して目に留めるべき出来事です。獣という権力者でさえ、この女の下にいました。女の中で権力者は生きていたのです。宗教と富と、それから政治が密着しています。しかし、そうした甘い汁を吸っている、金の杯をもって巨額の富を王たちから得ている女は、ついに憎まれます。自分たちが利用していれば、ついに憎まれ、滅ぼされるのです。人の情欲は、一度、そのような関係を持てば、激しい憎しみになりますね。そのようなことが、大淫婦にも起こります。ですから自分が、福音にある神の力ではなく、政治的な力、また金銭にある力に頼れば、必ず世そのものからも捨てられることになります。

¹⁷ それは、神のことばが成る時まで、神はみこころが実現するように王たちの心を動かし、彼らが一つ思いとなって、自分たちの支配権を獣に委ねるようにされたからです。

ここに、神の深淵な御心があります。大淫婦を滅ぼすことは、主の御心です。それで、獣と王た

ちが彼女を憎むことにおいて一つになっているのを利用されて、大淫婦を滅ぼすようにされるのです。しかし、彼ら自身も、獣を神としてあがめ、そして神とキリストに反抗する時に、徹底的に滅ぼされるのです。

¹⁸ あなたが見たあの女は、地の王たちを支配する大きな都のことです。」

ここで御使いが、はっきりと大淫婦が大きな都であると言っています。ネブカドネザルのバビロンが、国々を征服した後に君臨した都であり、ローマ時代のローマも、国々を征服した後の都であり、そして終わりの日にも顕著になる都も、同じように世界に影響力を持つ都です。そして女は、世に組み込まれた宗教の行く末がよく表れています。キリストによって召され、選ばれ、忠実であることと、そうではなく世を愛して、世の友になるのか？が問われています。「ヤコブ 4:4 節操のない者たち。世を愛することは神に敵対することだと分からないのですか。世の友になりたいと思う者はだれでも、自分を神の敵としているのです。」

